

吉野浩司著

『利他主義社会学の創造』

—P・A・ソローキン最後の挑戦—



評者：吉田 耕平

災禍の時代に向き合う行為の理論

1

「利他」と「利己」。禁断のキーワード、と言ったら大袈裟だろうか。魅惑に満ちていて、近寄り難いテーマである。そんなことを考えながら、この本を手にとった。

もっとも昨今、「利他主義」を巡る考察は巷にあふれている。生物学や心理学から社会福祉や宗教思想まで、多くの分野で「利他」と「利己」の関わりが議論されている。おそらく紛争や感染症、天変地異に見舞われた現代世界は、「他の人と助け合うこと」と「自ら生き抜くこと」をともに求めているのだろう。今回取り上げる本も、コロナ禍が急拡大する2020年の春に刊行された。もちろん世情に合わせた出版物ではない。本文340ページからなる浩瀚な学術書だ。だがその内容は、まさに時宜を得たテーマなのである。

最初に申し開きをしておくと、評者の専門分野は社会学の思想史である。他分野の動向を汲んだ書評は書けないし、利他主義論に詳しいわけでもない。だが、そうであればこそ気づくことがある。19世紀の半ば、初めて「利己主義」(egoisme)と対比させて「利他主義」(altruisme)

の概念を用いたのはオーギュスト・コントだったと言われる。この概念は、コントが初めて「社会学」(sociologie)という言葉を活字にした同じ著作の中に現れた。また半世紀後、エミール・デュルケームもこれら二つの概念を論じたことはよく知られている。ところがその後ずっと、社会学は他の分野よりもこのテーマに及び腰だった。いや、そう見えていたのである。そのイメージを塗り替えるのが、これから見ていく20世紀の社会学者、ピティリム・アレクサンドロヴィッチ・ソローキン(1889-1968)の学説にほかならない。

今回の書籍を著したのは鎮西学院大学の教授、吉野浩司先生である(以下「著者」と表す)。著者はかつて『意識と存在の社会学』を著し、ソローキンの理論体系を「統合主義の社会学」と論じた。その中でもソローキン晩年の「利他主義」(altruism)理論は取り上げられた。ただし、その位置づけは「素朴な神秘主義的思考」への「回帰」とされていた(吉野2009:166)。それから11年、著者は2冊目の単行本を刊行する。それが今回の対象作『利他主義社会学の創造』(以下「同書」と表す)である。今やソローキンの「利他主義」研究は「いくつかの大仕事をなし終えた後の、彼の畢生のプロジェクト」(同書3頁、以下頁数のみを記載)だと位置づけられる。言うまでもなく、これがソローキンの「最後の挑戦」であった。

同書の目標は、ソローキンの議論に基づいて「利他主義社会学」の性格を明らかにすることだ。その出発点は、ソローキンが晩年に書いた『ヒューマンティの再建』だという。これこそは「利他主義社会学の創造を宣言する」(4)著作だったと著者は見ている。ソローキンはこの中で「真の利他主義」(real altruism)について語った。これは、法の規定とは関係なしに「個人が他人の幸福のために、自分の正当な利

益をすすんで犠牲にする」(Sorokin 1948: 58=1951: 79, 訳文修正) (4) ときに現れる行為だという。このように、ソローキンが対象としたのは「利他的な行為」(altruistic conduct/action) であり、「犠牲」をいとわない行為だった。

はたして、著者はこのようなソローキンの議論とどのように向き合ったのだろうか。

2

著者の議論は、大きく二つの道りを辿った。その一つはテキストの読解である。その過程は第I部「ソローキン最後の挑戦」に示される。著者によれば、ソローキンの利他主義論については重要な先行研究が存在する。しかし「個人はどのようにして利他主義的な意識を獲得しうるのか、というパーソナリティの問題の切り込みが、あまりにも弱すぎる」という欠点があった(10)。そこで著者は、ソローキンのパーソナリティ論を手がかりとして議論を行う。

評者が理解したところによると、最初の三つの章は「利他的な行為」に赴かせるものを論じる部分だ。まず著者は昨今の研究動向を参考に、「何かのため」ではない「純粋な」利他的行為が重要であると指摘する(第1章)。ソローキンによると、それが可能となるのは「上位の」「超意識」のもとで「自我の対立」が「調停」されたときである(第2章)。これは人々が「観念的心性に目覚め」、「超意識を働かせる」ことではじめて実現する。これがソローキンの議論だった(第3章)。おそらく読者の多くは、宗教に範例をとった観念的心性や超意識の説明を読むと戸惑うだろう。実際ソローキンは、預言者や神秘家の例を列挙している。しかし、来世での「救済」や現世での「恍惚」が絶対に必要というわけではないはずだ。むしろ

著者の眼目は次の点にあらう。——宗教であれ何であれ、人はときに理解の及ばない事柄に出会い、思いがけず新たな物事を生み出す。このことはおのずと人を利他的な行為に赴かせる、と。

続く二つの章では、この論点を支える「根拠」が問われる。そのために、人はなぜ利己的な意識を離れうるのかが説明される。著者は、初期のソローキンが書いたトルストイ論に注目する。その主題は、「私」とは何かという問題だった。その考察によれば〈私〉とは、決して「個体としての自分」に限られる存在でない。それは他者の中の〈私〉とともに、「生きとし生けるもの」(Sorokin [1912] 1914 = 2016: 64) の一部なのだ。そのため、私を愛することが即ち他者を愛することになる(第4章)。これは晩年のソローキンに見られない議論だ。一方、エーリッヒ・フロムは自己愛こそが他者愛であると論じ、初期のソローキンと同様の視点を示していた(第5章)。これをもとに、著者は利他主義論の「存在論的根拠」が得られたと見る。これは、晩年の「犠牲をいとわない」利他主義論に修正を迫るものと思われるが、この点について著者は述べていない。

残りの章で、著者はもっと具体的な事柄を取り上げる。ここで問われるのは利己的な意識を離れるような実例があるか、ということだ。まず、なぜ戦争はなくなるのか。ソローキンによると、それは利己的な意識による相対主義が蔓延しているからだという。利他主義の困難は大きいことが分かる(第6章)。一方、ソローキンによると日常生活の中の「善き隣人」(good neighbors) は利己的な意識を乗り越えている人々だ。著者は、この議論が柳宗悦による「妙好人」(みょうこうじん) 論に似ていると見る。善き隣人も妙好人も、ふとしたときに自分を超えた大きな力に気づき、日々、人のた

めに汗水を流すのである（第7章）。このことから、「観念的心性に目覚め」「超意識を働かせる」ような機会はどこにでもあると言える。それが世界全体に広がっていくことが課題である、というのが著者の考えのようだ。

ただし、評者の理解は唯一の読み方でないかもしれない。他の書評では「ボランティアなどいわゆる利他主義的行為は超意識の感得者を前提としなくても成り立つ」（熊田 2020：529）という批判的な指摘もある。だが「人間意識を超えたところで」（45）機能する超意識について、「感得」などは必要なのだろうか。一方、同書の狙いを「対象とする学説が啓蒙する実践を、自らもまた啓蒙すること」（飯島 2021：154）と捉える論者もいる。だが「知識としてではなく、体験として」（140）身につく行いを「啓蒙」することは可能なのだろうか。

3

これらの点について判断するには、第Ⅱ部の「世界社会学史におけるソローキン」も見ておかなければならない。ところが、このパートは先ほどの内容とは全く別の道のりを辿る。その課題は、各地の研究者と対談して「世界の社会学におけるソローキンの受容史」（339）を読み解くことだ。注目すべきは、そのために著者がとった方法である。それは、著者みずから東・中・南欧を訪ねてソローキンの足跡を辿るというものだ。その行程を順に紹介したい。

皮切りとなったのは、二度にわたるロシア連邦共和国への訪問である。著者は2015年1月、現コミ共和国の「トゥリヤ」という寒村にソローキンの生家を視察した。同国の首都では現地との研究者と交流する。これを通じ、ソローキンの出身民族「ジリヤン」（現在の「コミ族」）には「三層の宇宙観」や「相互扶助の精神」があったことなどを教わった（第8章）。翌2016

年9月、こんどは青年時代のソローキンの足跡を辿った。著者はヴォログダという地方都市を経てサンクトペテルブルクへ向かったソローキンの旅路を確認し、ペテルブルク大学等の研究者からは当時の学問コミュニティやソローキンの著述について教わった（第9章）。これらの事柄が利他主義社会学の「バックボーン」となったのではないかと著者は考察する。

著者はロシア以外の地にも足を運んだ。それぞれ、短期間ながらソローキン自身が滞在した国である。その一つ、現在のチェコは2017年9月に訪ねた。ソローキンが12ヶ月ほど過ごしたプラハと、第二の都市ブルノを視察した。ソローキンが受けた知遇や、チェコの社会学は「農業研究」や「スピリチュアリティ」「実践性」を重視しているという特徴を教わった（第10章）。もう一つの国、イタリアを訪問したのは2018年9月である。ソローキンは学生時代、2週間だけイタリアに滞在したという。現役の研究からのヒアリングにより、同国のソローキン研究では「宗教心」や「倫理観」が重視され、昨今は利他主義理論が盛んであると知る（第11章）。著者はあらためてソローキンの「観念的心性」論の重要性を確認したようだ。

これに続く章では、目を転じて日本における研究史を跡付けている。それによると、ソローキンの主著『社会的文化的動学』のほか、『都市農村社会学原理』や『社会移動』に関する議論は数多いという。一方「利他主義」研究に論じたのは今崎秀一と細川幹夫という二名の人物に限られたようだ（第12章）。著者の研究は、これらの領域を横断するものと言えよう。

第Ⅱ部の内容を振り返って、著者は「世界に開かれた風通しのよい著作にしたかった」（341）と語っている。じつに、そこにはふんだんに世界の社会学者たちとの対話が記録され、読者がそれを追体験できる「風通し」のよさが実現さ

れている。一方、第Ⅰ部の話題（利他的行為に赴かせるもの）についての対話は、とくに記されていない。イタリアのソローキン研究者は、宗教心の「感得」を必要と捉えるのか。チェコの「実践的」社会学は、ソローキンの学知が「啓蒙」を担うと見るのか。各地の研究知見について、気になった読者は多いはずだ。

4

本書は二つの道のりを経て、最後に合流する。これによって得られる展望を見ていこう。

第Ⅰ部の途中、著者はテキストの〈間〉を読み解き、ソローキンを抜け出ていく構えさえ見せた。反対に第Ⅱ部では21世紀の世界を歩き回り、ソローキンその人の「バックボーン」と「現代的意義」に肉薄していった。この足取りを終えた著者は、〈なぜ人々は利他的行為を行うのか〉から〈どのように社会学者は人々の利他的行為に関わるのか〉へと歩を進める。

そのため、終章では利他主義でなく、利他主義の社会学の性格が考察される。

利他主義社会学は……単に善行を勧めたり、喜びや幸福感を発揚させたり、平和や理想をめざす社会運動のあり方を考えるのではない。むしろそれらを根底から支えている個人のあり方を反省的にとらえなおそうとするのである（324、強調付加）。

ここまで述べてきた内容を凝縮したような一文である。利他主義社会学は、人々を特定の方向へと突き動かそうとはしない。見てきたように、人々にとって重要なのは知でなく、行いである。社会学はそのための条件を把握し、その条件づくりにも寄与するだろうが、人々を劇的に変えるわけではないだろう。そのような線形的な発想は、示されていないはずだ。人

は日々、感じられるものを感じ、行えることを行う。しかしふとしたことから利己的な意識を抜け出すこともある。その把握と支援に徹するのが利他主義社会学ではないだろうか？

本書の先には、学知が人々に与える影響を問う研究が待っているように思われる。この点で著名な宇賀博（1971, 1976）の議論を発展させることも可能だろう。同時に、この宇賀が果たせなかったことも期待される。それは現今の研究を俯瞰し、乗り越える論文を『アメリカ社会学評論』（*American Sociological Review*）に掲載することである。同誌は過去、ソローキンの思想や立場を巡って議論が闘われた場である。社会学界最大のインパクトファクターを持つ一流誌でもある。ここを舞台として著者の説を世界に投げ返し、ソローキン研究の新たな通説を形成してほしい。

本稿で見てきた「利他的行為に赴かせるもの」の議論は、社会学のみならず生物学や宗教思想においても広く理解される普遍性を備えている。「利己」と「利他」、自己愛と他者愛の両立というテーマは、心理学や社会福祉のような実践性の高い分野とも通じ合うだろう。今なお深まる我が国の原発事故被害や外国籍住民の人権抑圧、そしてコロナ禍とウクライナ侵攻における生命と尊厳の危機といった事態は、「利他主義」の実践を切実に必要としている。そうした課題に目を向けさせる真摯な試みとして、本書の刊行を歓迎したい。

（吉野浩司著『利他主義社会学の創造——P・A・ソローキン最後の挑戦』昭和堂、2020年5月、xvi + 342 + xxi頁、定価4,290円（税込））
（よしだ・こうへい 東京都立大学人文科学研究科客員研究員）

【参考文献】

熊田俊郎（2020）「書評 吉野浩司著『利他主義社会学の

- 創造——P. A. ソローキン最後の挑戦』『社会学評論』71 (3) : 528-529
- 飯島祐介 (2021) 「アクチュアルで実践的な学説研究書評対象書：吉野浩司著『利他主義社会学の創造——P・A・ソローキン最後の挑戦』」『現代社会学理論研究』15 : 150-154
- Сорокин, Питирим А., [1912] 1914, «Л. Н. Толстой как философ». = 吉野浩司訳「哲学者としてのЛ. Н. Толстой」『長崎ウェスレヤン大学現代社会学部紀要』2016年, 14 (1) : 53-65
- Sorokin, Pitirim A., 1948, Reconstruction of Humanity, Boston, The Bacon Press. = 北吟吉訳(1951)『ヒューマニティの再建』文芸春秋社
- 宇賀博 (1971) 『社会学的ロマン主義——アメリカ社会学思想史』恒星社厚生閣
- 宇賀博 (1976) 『「社会科学」から社会学へ——アメリカ社会学思想史研究』恒星社厚生閣
- 吉野浩司 (2009) 『意識と存在の社会学——P. A. ソローキンの統合主義の思想』昭和堂